

まとめ

これまで障害がある人の社会参加のしやすさについて考えてきました。改めて「社会」の語義を調べると「複数の人びとが持続的に一つの共同空間に集まっている状態、またはその集まっている人びと自身、ないし彼らのあいだの結びつきを社会という」(※世界大百科事典第2版より)とあります。つまり、“社会参加のしやすさ”とは、人々の集まりへの参加のしやすさとも言えます。

しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から障害の有無に関わらず、全ての人が集まることを制限され、不要不急の外出は控えられました。そのような中、外部との接触が激減し、衰弱した盲ろうの人の新聞記事を目にしました。人との距離を空けることが求められる今の状態ですが、人との接触が減ることで、命にかかわる人もいます。また、障害がある人の中には、障害特性による情報の得にくさ、コミュニケーション方法や障害特性の理解が進んでいないことなどから社会参加がしにくい人もまだまだいます。

今回、実施した芸術鑑賞会や食のワークショップでは、障害当事者だけでなく、障害当事者と一緒にイベントを楽しみたい人も参加対象としました。その方たちの感想として「交流ができてよかった」「(障害のある人の)日常生活の大変さを知った」等がありました。普段から交流する機会が少ないことから、障害がある人は、どのようなことに障壁と感じているのか、どのようなことに困っていて、どのようにしてコミュニケーションを交わすのか知らない人もいました。しかし、専門的な知識がなくとも、ほんの少しの配慮や工夫をすることで、その障壁を取り除くことができる可能性があります。そして、正解か不正解だけでなく、様々な考え方や価値観があると知ることから障害がある人への理解が広がると考えています。

また、今年度は障害当事者、支援者に加えて地域の人々とも一緒に取り組みました。社会参加を考える上で、まちと人は切り離せません。つまり、まちの中において、身近に安心できる場があり、障害について理解がある人が増えることから、まちの中で障害がある人が主体的に参加できる機会が増えると考えています。引き続き、障害のある人の社会参加のしやすさを更に広げていけるように取り組んでいきます。